

考える力を育てる言語活動 ～編集する力を高めるための指導の工夫～

新発田市立東豊小学校 教諭 澁谷 かおる

1 はじめに

新学習指導要領では「書くこと」の領域で、主題設定と取材が明確化され、推敲も重視されている。また、交流も新設された。

昨年度は、「書く」力を身に付けさせるために、1年生では、どのような題材を設定し、どのような指導方法を工夫していけばよいかを研修した。

今年度は、2年生で、考える力を育てるための言語活動の工夫について、「しょうかい文を書こう」の単元で授業実践を行った。

2 授業実践の概要

(1) 主題設定

来年度のクラス替えに向けて、今年度は、学年での活動を意図的に設定してきた。この単元でも「他のクラスの友達にこのクラスの友達のよさを伝えよう」という単元を貫く課題を持たせた。子どもたちは、相手をよく知らない人にも分かるような文章を書こうという意欲を持つことができた。

(2) 単元の目標

◎友達のよいところを見つけ、構成を考えて、友達を紹介する文章を書くことができる。

(3) 取材方法

①書く材料の集め方

隣の席の友達の紹介文を書くことにしたが、同じクラスとはいっても、普段あまりかかわっていない子のことは、見たり聞いたりしたことの想起だけでは、十分な材料集めができない。そこで、もっと知りたいことを互いに聞き合う活動を設定した。また、このようなインタビュー活動は、生活科では体験しているものの、国語科では初めてだったので、

- ・尋ね方やもっと詳しい聞き方などをまとめたインタビューカードを提示する。
- ・隣の席の子と違う子同士でペアを組んでインタビューの練習をする。

という手だてをとった。そのため、どの子どもたちも、より詳しく知りたいと思ったことを、相手から聞き取ることができた。

＜インタビューカード＞から（抜粋）

◇たずねること

- ・好きなことは何ですか。
- ・とくいなことは何ですか。
- ・ずっとつづけていることは何ですか。

◆もっとくわしくたずねること

- ・いつから～ですか。
- ・どれが一番～ですか。
- ・これからどうしたいですか。

②紹介文の書き方

「紹介文」を初めて書く子どもたちに、その条件を理解させるための教材文を提示した。その際、教科書の教材文（B）の他に、好きなことや得意なことをたくさん羅列した自作の教材文（A）を提示し、2つを比較して考えさせることにした。

自作の教材文は、

- ・子どもがどちらを選んでも「間違った」という思いを持たせないように、よさがたくさん書かれているという特長がある文にする。
 - ・よさの詳しい説明はない文にする。
 - ・よさを知らせない題名にする。
 - ・「～さんのいいところは、ほかにもあります。」というようなつなぎの文を入れない。
 - ・どうしてそう思ったかという理由を入れない。
 - ・自分の思ったことを入れない。
- という点を配慮した文章にした。



教材文を比較して考えさせたことで、子どもたちは、全員が、自分はどちらが良いと思うかを、その理由も考えながらノートに書くことができた。

③互いの考えを伝え合う

自分の思いを全員が表現できる場を確保するために、見つけた教材のよさを隣の友達と伝え合う活動をした。その際「私は〇がよいと思います。わけは～だからです。」という話形を使わせるようにした。また、相手の話に対して「それはいいですね」「なるほど。よく分かりました。」というように、よさを認めたり、同意したりする言葉を使わせるようにした。

これらは、この授業だけでなく、他教科でも普段から「対話しましょう。」という形で、子どもたちに何度も練習させてきたので、スムーズに意見を伝え合うことができた。その結果、「Cさんが気付いたところに、私は気付かなかったけど、いい考えだと思うので、私もノートに書いてもいいですか。」というように、友達の考えを自分の考えに付け足すという姿が見られた。



さらに、この後に、全体で話し合う場を設定したが、どの子も自分の考えを隣の子に承認してもらえたので、自信を持って挙手し、次々に発言することができた。そのため、紹介文の条件としてとらえて欲しいと思っていた点をすべて確認することができた。

(4) 紹介文を書く

取材した友達のよさを紹介文に書く段階で、

つなぎの文、自分の思い、友達のよさと、それぞれ書く項目によって色違いのカードを準備し、構成を意識しながら文章を書かせるという手だてを考えていた。しかし、教材文を比較して考える学習で、紹介文の構成理解が十分できたからか、色違いカードを使用した子は1名だけで、その他の子は、カードを使わなくても、自力で書き上げることができた。

(5) 推敲と交流

①推敲

チェックカード（声に出して読みながら、漢字や助詞、句読点、かぎかっこなどを正しく書いているかを項目ごとにチェックできるもの）を使用して推敲させた。ほとんどの子が自分で推敲できたが、自力で見つけられない子もいたので、班毎に回覧して読み、誤りをチェックして相手に知らせる活動も行った。

②交流

他のクラスの友達に紹介文を渡す前に、クラスで「誰でしょうクイズ」を行った。名前が隠された紹介文を読み、誰のことかを当てるものである。正解率が高い紹介文は、その人のことを詳しく、分かりやすく書いているからだともんなから評価されていた。

他のクラスの紹介文は、一人でも多くの友達のことを知ろうという意欲が高かったため、事前に掲示していた顔写真と照らし合わせながら「Dさんは、バレーボールが得意なのかあ。」と、新しく知ったことを嬉しそうに確認する姿がたくさん見られた。

3 おわりに

この授業実践の他にも「書く」単元の学習実践で感じたことは、単元を貫くねらいを確実にもたせ、そのねらいの達成のために今の学習があるということを意識させることが大切だということである。比較教材やペア対話についても、授業の中に繰り返し取り入れることで、子どもたちが楽しく学べる土壌ができると実感した。